

幼稚園5歳児及び小学1年生の動的家族画：発達と家族への思い

山尾沙耶香

田中吉資

(学校法人四国高松学園 高松東幼稚園) (幼児教育)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

Kinetic Family Drawings of 5-year Old Kindergarteners and the First Grade Pupils : Developmental Changes of the Drawings and Children's Sentiments towards Their Family

Yamao Sayaka, Tanaka Kichisuke

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

要旨 幼稚園5歳児及び小学1年生各1クラスの子どもの動的家族画を検討した。子ども達の絵は、①自分も含めて②家族のみんなが③何かをしているところを④頭の手から足の先まで、描くという動的家族画の要件をどれだけ満たすかに応じて発達する。女児には太陽や花などを描き込む装飾傾向があった。こうした発達差や男女差の中で家族への思いや問題が絵に表現される。動的家族画の投影的解釈はこの時期の子どもの場合適切ではないことを指摘した。

キーワード 動的家族画 描画の発達 描画の性差 幼児画 児童画

1 はじめに

子どもの絵に関する研究は、年齢に伴う描き方の変化を問題にした発達の研究、描き手の心情や性格、知能等の心的過程や特性と絵の表現との関係を取り扱う心理アセスメント的研究、そして描き方の指導に焦点を当てた指導論的研究、以上の3種に大別できる。

本研究は、幼稚園5歳児及び小学1年生の子ども達の動的家族画について発達の検討を行うとともに、子どもの思いや家族の問題がどのような形で絵に表れるか、子どもの動的家族画の心理アセスメント的可能性について論考するものである。

動的家族画 (Kinetic Family Drawing) とは「動きや行動を伴った家族画」のことであり、Burns & Kaufman (1972) が開発した心理アセスメント法の一つである。課題は、A4サイズ

の白紙に鉛筆で「描き手も含めて家族のみんなが何かをしているところを頭の手から足の先まで描く」ことである。こうして描かれた絵の活動内容、スタイル、シンボルなどを投影的視点から評価し、被検者の自己意識や性格、他の家族に対する心情や願望、さらには精神病理的問題点を明らかにすることをめざしている。

ここでの投影とは、個人の内的な経験や感情、欲求、イメージ、個性などは無意識のうちに特定の象徴的形態や色彩を借りて絵に表現されるという考え方に立脚して、絵に表された形態や色彩を手掛かりにして個人の内的な過程や特性を解明しようとする方法論を意味する。一般に、精神分析学の影響を受けていることが多い。

動的家族画というスタイルは、描かれた人物を線で囲んだり、区切ったりすることなどを指す。描き手が孤立感を感じていたり、ある家族メンバーに対して恐れなどの感情を抱いていた

りすると、このような線による囲いや区切りなどが表れると考えられている。シンボルとは、特定の感情や欲求を含意する絵柄のことであり、例えば、花は美しい愛や成長過程を表し、ベツトを描くことは性的テーマや死などの陰鬱な感情を意味すると解釈されている。

Prout & Phillips (1974) は、動的家族画に示唆を受けて、動的学校画 (Kinetic School Drawing) を提案している。これは、自分と教師と級友が何かをしているところを描くという課題である。例えば、Prout & Celmer (1984) は、小学5年生の動的学校画の分析から、積極的な学習活動を描いた生徒の学力が高いと報告している (この項は、Knoff & Prout (1985) による)。

このような動的家族画や動的学校画は、心理臨床家のみならず保育者にとっても子ども理解の魅力的な道具であるように思われる。幼児は言葉による表現力が十分ではないので、絵がその子の内面世界を知る恰好の手掛かりになると考えられるからである。

幼児の事例について、Burns & Kaufman (1972) は5歳の子どもの動的家族画とその解釈を掲載している。わが国の子どもの事例を分析・検討した日比 (1986) は4歳や5歳の子どもの動的家族画について解釈を行っている。また Knoff & Prout (1985) には5歳の幼児の動的家族画と動的学校画が示されている。

しかしながら、少なくとも10歳前後までは子どもの絵は発達途上にある。辻 (2003) の言葉を借りれば、この年齢ぐらまでは大人と違った描き方をする。とりわけ小学校低学年までの子どもの絵にはいわゆる幼児画的・児童画の特徴が顕著である。だが上記諸研究はそうした発達の差を考慮していない。成人の場合と同じ見方で幼児の絵に見られるスタイルやシンボルを解釈している。

発達の観点から動的家族画を論究しているのは、加藤 (1999) である。彼は、動的家族画については本格的な発達の研究はまだ行われていないと指摘し、東山・東山 (1983) の描画の発達段階説に照らして各年代の動的家族画の特徴づけを試みている。そして、幼児期から児童期

に見られる区分化や包囲などのスタイルは、レントゲン画の出現や写實的に描こうとする発達の傾向などに関係づけることができるとし、描き手の子どもの感情の投影として解釈する Burns らの考え方に疑問を投げかけている。

シンボルに関しては、男女差の問題、特に女兒の絵に特有な装飾傾向の問題も無視できない。

皆本 (1986) は、「男性画が現実を再現しようとするのに対して、女性画は絵画上に“きれいな世界を求め、現実を装飾し、美化することを楽しむ。その装飾性はおよそ3歳代からみられ、5、6歳の女の子の絵は、なんらかの装飾性をともなうのが普通であり……5歳から8歳頃までの女の子の自由画は、ほぼ全員が同じような花や太陽、木、蝶などのモチーフ構造で美しい楽園を描出する」と論じている。そして、このような装飾傾向は、日本だけではなく、アフリカ・ケニアの女の子など、世界中の女の子に見られると主張する (皆本, 1984)。東山・東山 (1999) も、「(5～8歳頃の) 女の子は、人形のような人、チューリップ、太陽と、記号のような典型的な形を組み合わせ、装飾的で、独自のスタイルで絵をかく」と述べ、装飾傾向に関わる子どもの絵の男女差を認めている。

2 動的家族画の描画水準

我々は、幼児の動的家族画を集めて発達の検討を行ってきた。そうした作業を通して、動的家族画の発達に関して次のような仮説を得るに至った。

動的家族画の課題は、①自分も含めて、②家族全員が、③何かしているところを、顔だけではなく④頭先从足先まで、描くことである。子どもの動的家族画は、これら4つの要件を満たしている程度によって、以下の5つの描画水準のいずれかに分類できる。各水準を例示する絵を Fig. 1 から Fig. 5 に示す。図中の数字は人物を描いた順番である。なお、Fig. 1 以外は本研究で検討した子ども達の絵である。

水準1 ①自分も②他の家族も描くが、③と④の条件を満たしていない絵。自分と家族の顔だけ

しか描いていないので、何をしているところかは絵からはわからない。

Fig. 1は、5歳児男子の絵である。最初に大好きな父親を描いた。しかし描き終えた時点で大きく描きすぎたことに気づき、2番目以降の人物から小さくなっていった。人物の周りがある丸や四角は描き間違いで、特に意味はない。家族全員を描いているが、③何かをしているところと④全身を描くという2つの要件を満たしていない。絵からはおだやかで友好的な家族関係という印象を受ける。動的家族画における診断の指標の1つであるスタイルは、一般的様式である。

水準2 ①自分及び②他の家族の姿を④頭の前から足の先まで描こうとしている。だが、要件③を欠く。何をしているかは絵からは読みとれない。人の姿勢や動作を表現する描画力がまだ不十分だからである。水準2の絵にはほとんどなく頭足人を思わせる絵が多い。

Fig. 2は、5歳児男子の絵である。左から順に家族を描いていった（2番目は描き損ない）。3人目を描き終わった後、「妹と自分が描けない」と訴えてきた。結果として、妹と自分を空いたスペースに他の人物より少し小さく描くことになった。紙幅に余裕があれば、妹と自分も右へ右へと横一列に並べて描いたかも知れない。本人によれば、ただ家族を描いただけで、「何かをしているところ」を描いた意識はない。絵からは、家族間に問題は感じられない。スタイルは一般的様式である。

水準3 水準2に「羅列表現」という要素が加わったのが水準3である。課題と紙面の大きさを考え合わせて「家族みんな」を描くようになった絵である。羅列されていることもあり、非常にすっきりと、また手足がきちんと分化されて、より人間らしく描けるようになっていく。しかし③何かをしているところかは絵からはまだわからない。

水準3以降、特に女兒の絵には、太陽や花、蝶などが描き込まれたり、パッチリした目つきの顔とかウインクしている表情の人物が描かれるなど、いわゆる装飾傾向が顕著になる。

Fig. 3は、5歳児女子の絵である。家族の羅列表現で、絵からは何をしているかはわからないが、母親の感想文から、家族で花や球根を植えているところであることがわかった。「太陽」「花」「蝶」など、装飾傾向を示す描き込みがある。眼の描き方も特徴があり、5～6歳の女の子が描く代表的なタイプの絵である。スタイルは「下部の線」。「下部の線」は「崩壊しかけている家庭とか、強いストレス下にある児童の描画に認められる」とされている（日比、1986、56頁）。しかしながら、絵の印象からも、母親の感想文からも、そうした問題は感じられない。

水準4 羅列描写もまだ多く残されているが、家族が「何かをしているところ」を表現しようとして、家族みんなでの活動（例えば食事とかピクニックなど）が描かれている絵。この水準になって、①自分も含めて、②家族全員が、③何かしているところを、④頭の前から足の先まで描く、という動的家族画の要件を基本的に備えた絵になる。しかしながら、時間的・空間的に同一の場で家族みんなが何かしているところを描くという考え方しかできないので、あるいはそれだけの表現しかできないので、家族一人ひとりに対するその子の思いなどは絵からははっきりとは読み取れない。そのような限界がある。絵の内容は、日常生活の一場面、過去の家族の楽しい出来事の思い出、夢や憧れ・願望、以上の3種に分類できる。

Fig. 4は、家族でのもち焼きの思い出を描いた小学1年生男子の絵である。「家族が何かをしているところ」を描いているが、一人ひとりに対してその子が抱いているイメージや感情が表現されるまでには達してない。従来の解釈においては、後ろ向きの人物像は否定感情と関連することが多いとされているが（日比、1986、101頁）、この絵の父親と祖父の後ろ向きの姿は、もちを囲んでいる様子を描写するためなので、特別な感情があるとは考え難い。スタイルは防衛的構えの指標とされている「辺縁位」（日比、1986、56頁）と判定できるが、これも、もちを囲んでいる家族の様子を描こうとした結果である。

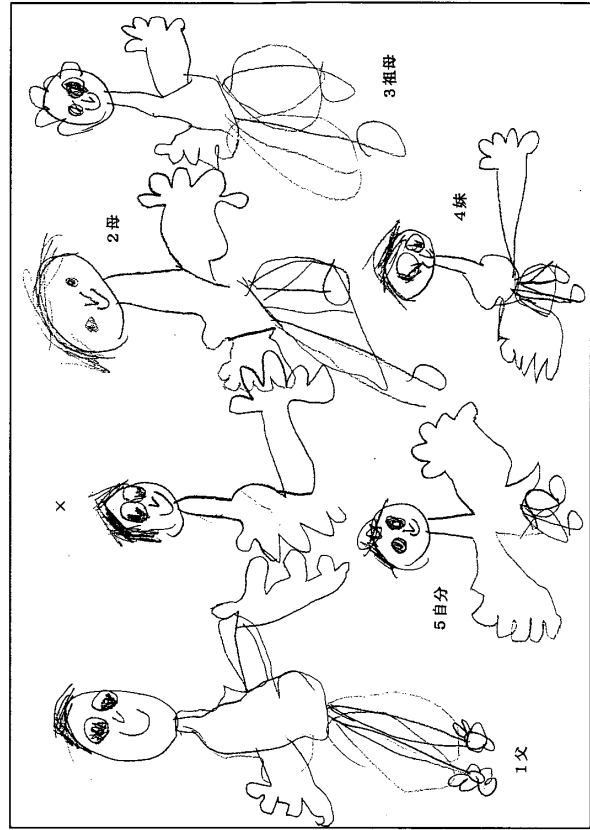


Fig. 2 描画水準 2 5歳8ヶ月男子

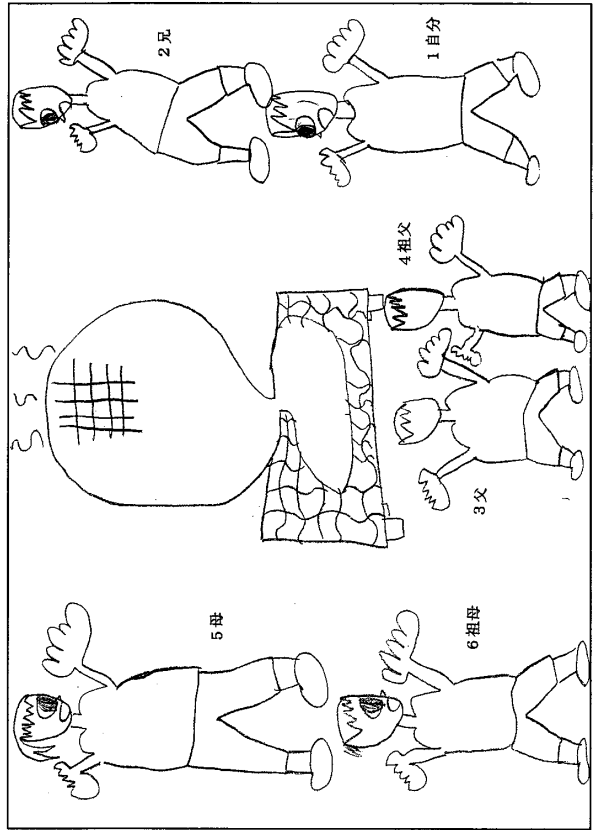


Fig. 4 描画水準 4 7歳3ヶ月男子 (もちを焼いている絵)

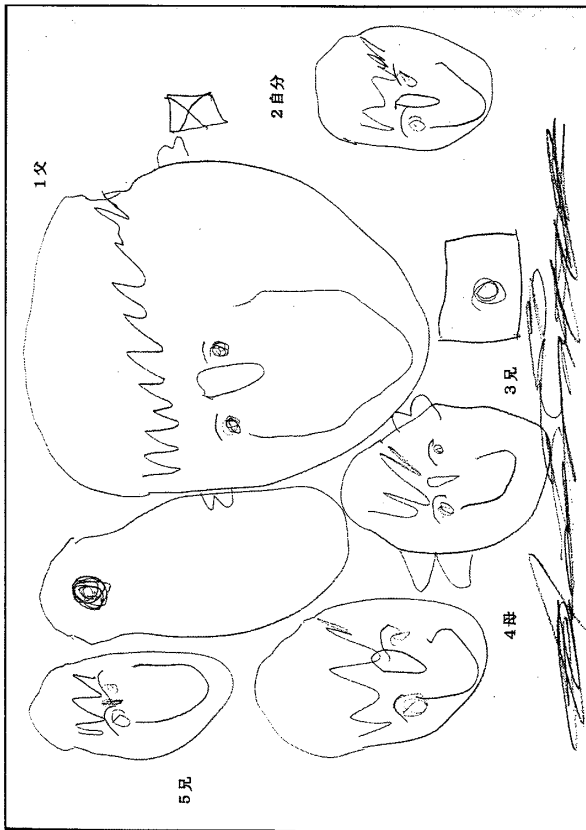


Fig. 1 描画水準 1 5歳10ヶ月男子

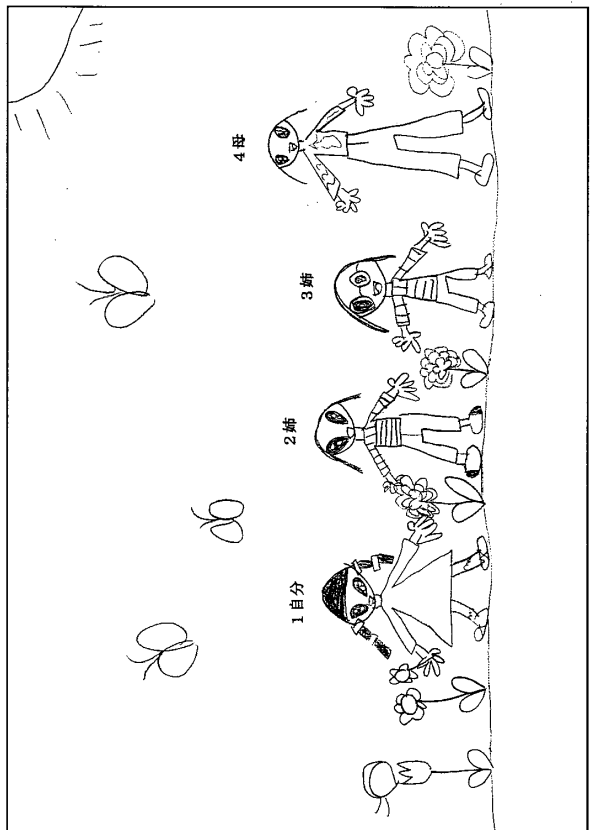


Fig. 3 描画水準 3 5歳10ヶ月女子 (花や球根を植えている)

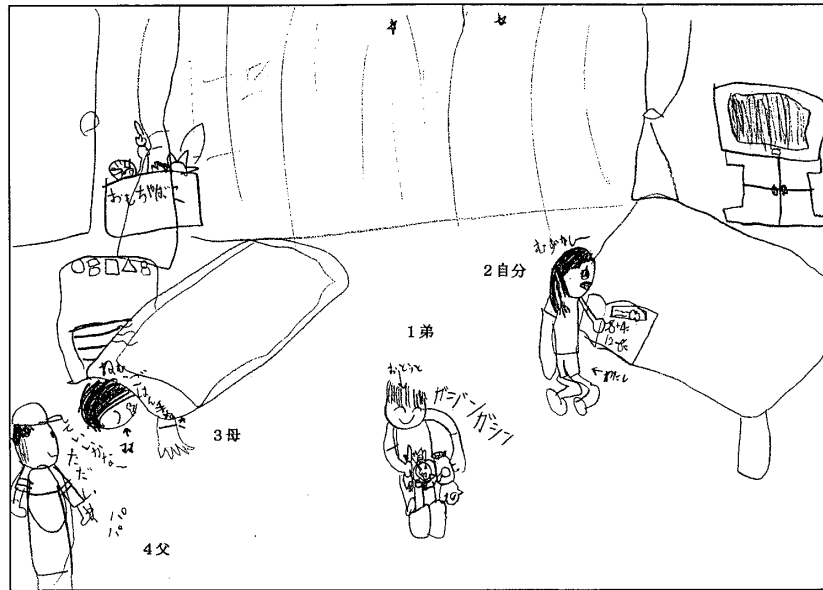


Fig.5 描画水準5 7歳8ヶ月女子（日常生活の一場面）

水準5 4つの課題要件を満たすだけではなく、その子どもの視点から見た家族一人ひとりの個性が画像的にはっきりと表現されるレベルに達した絵である。水準4の場合は同じ時間・同じ場所で一緒に活動している家族の姿に限定されるが、水準5では、時間的にも空間的にも一緒にいない家族が同一画面に描かれることも起こり得る。なによりも、描き手の子どもがそれぞれの家族に対して抱いているイメージや思い、感情などが描かれていることが決定的である。

Fig.5は、1年生女子の絵である。家族一人ひとりの姿が描き分けられ、それについて本人は、「弟…おもちゃで遊んでいる」「自分…宿題をしている」「母親…仕事を終え疲れて寝ている」「父親…仕事から帰ってきたところ」と述べている。母親の「ねむー、ごはん手ぬきしていいかなー」という書き込みの言葉には驚かされた。普段の何気ない一言が子どもの心に強く残り、母親のイメージを形成していることがわかる。「玩具」「寝具」「テレビ」「テーブル」「書籍」「星」がシンボルとして描かれている。スタイルは一般的様式と判定できる。

3 研究目的と方法

本研究は、上述の発達仮説の検証を基軸として、幼児期から児童期にかけての動的家族画に

どのような発達の変化や男女差があるかを定量的に分析することを目的としている。また、子どもの問題行動や家族に内在する問題点、家族への思いなどがどのような形で動的家族画に表れるかを検討することも目的であった。

被検児は、香川県内のA幼稚園5歳児及びB小学校1年生各1クラスの子ども達である。

なお一人の1年生男子は、自分自身も含めて家族を描くことを拒み、外から自宅を見た絵しか描かなかった（「絵が語る家族の問題・子どもの問題」のFig.9, D男の事例）。これは動的家族画の基本要件をひとつも満たしていないので、データ分析からは除外することにした。

分析に用いた5歳児は男女各17人、計34人、平均年齢は6歳3ヶ月であった。1年生は男子20人、女子19人、計39人、平均年齢は7歳3ヶ月であった。動的家族画を施行した時期は200X年12月11日から21日までの間であった。

5歳児は、5～6人ずつ幼稚園の一室に集め、互いの絵が見えないように適当な間隔を置いて机に向かって着席させた。そして、机の上に白無地のA4サイズ(21.0×29.5cm)のコピー用紙を横長にして置き、子どもには2Bの鉛筆を渡して、次のように指示した。「みんなの家族（今、一緒に住んでいる人全員）が何かしているところを描いてください。顔だけではなく、頭の前から足の先まで描いてください。もちろ

ん、自分も描いてください。」

子どもからの質問には、回答が描画結果に影響しないように注意しながら対応した。

子どもが言葉や動作で描き終わったことを示したときを終了とした。制限時間は設けなかった。子どもが描きたくない気持ちを示した場合には、絵を完成させるように励ました。

1年生は教室で一斉に実施した。他の条件は、5歳児とほぼ同一である。

完成後、(1) 描かれたそれぞれの人物が誰であるか、(2) どんな順番で描いたか、(3) 何をしているところの絵であるか、を子ども達一人ひとりに質問した。5歳児の場合、(2) に関しては絵を描いている過程を観察して記録した。

5歳児に関しては、子どもの絵のコピーを母親に渡し、絵の感想を書いてもらった。その際に、母親から見た家族の状態を知るために、Olson et al. (1985) が開発し、草田・岡堂 (1993) が日本語版を作成した質問紙法テスト、FACE III (Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale III) への回答も依頼した(草田, 1995も参照のこと)。本来このテストは、現実の家族機能と理想の家族機能の両面を評定することになっているが、本研究では現実の家族機能に限って評定を求めた。34人の母親全員から感想文とFACE IIIの回答結果を得ることができた。

1年生については親の感想文も家族機能テストも得ることはできなかった。そこでクラス担任の教師に一人ひとりの絵を見てもらい、絵を見ての感想をその子の普段の様子とあわせて語ってもらった。

4 結果の分析

子どもが描いた動的家族画について描画水準、装飾傾向、描画の内容、スタイル、シンボル、描画の方向性、家族を描く順序などを判定・集計し、年齢別、男女別の分析・検討を行った。

Tab. 1は、描画水準と装飾傾向に関する集計表である。

1° 描画水準 5歳児の動的家族画の描画水準は水準3と4に集中していた。男子の場合、家

族を羅列的に描く水準3が約6割、女子では家族が何かをしているところを描き表している水準4が7割を占めていた。水準3以下と水準4以上に分けて検定すると、男女間で分布に有意差があった($\chi^2=5.848$, $df=1$, $p<0.05$)。1年生になると男女いずれも約7割が水準4で、残りは水準5になる。1年生では描画水準の分布に男女差はなかった。5歳児と1年生の間には描画水準の分布には有意差があった($\chi^2=25.287$, $df=3$, $p<0.01$)。

2° 装飾傾向 皆本 (1986) が装飾傾向の指標とした太陽、花、蝶のいずれか1つ以上を画面に描き込んでいるか否かで、装飾傾向の有無を判定した。5歳児で装飾傾向が認められた絵は、男子は17人中1人 (5.9%)、女子では17人中10人 (58.8%) だった。男女差は有意だった($\chi^2=10.880$, $df=1$, $p<0.01$)。1年生でも、男子は20人中1人 (5.0%)、女子では19人中11人 (57.9%) で、ここでも男女差は有意であった($\chi^2=13.4$, $df=1$, $p<0.01$)。

要するに、女子では5歳児でも1年生でも半数以上の動的家族画に皆本が指摘する装飾傾向があり、男子ではそうした絵は極めて少ない。

日比 (1986) は、Burns & Kaufman (1972) に従って、6歳女子の動的家族画に描き込まれた太陽と花について「家庭内の暖かさと愛情の象徴 (シンボル) に他ならない」と解釈している (59頁)。しかし、上述のようにそれが女兒特有の装飾傾向によるものだとすれば、この解釈は適切ではない。

3° 描画の内容及び装飾傾向との関係 水準4及び5に属す動的家族画には、家族が何をしているかが描かれている。そうした描画の内容は「日常生活の出来事」「思い出」「夢・願望」の3種に大別できる。Tab. 2はそれらを集計したものである。

5歳児では男子も女子も、1年生では男子の場合に、「日常の出来事」を描いた者が最も多く、5割代から6割代に達する。「思い出」がこれに続き、「夢・願望」を描く者はごく少ない。ところが1年生の女子では「思い出」が「日常の出来事」を押さえて過半数を占める。

Tab.1 描画の発達水準 数値は人数、()内は各群における%

水準	装飾傾向	5歳児						1年生					
		男子		女子		男女計		男子		女子		男女計	
2	なし	1	(5.9)			1	(2.9)						
3	なし	10	(58.8)			10	(29.4)						
	あり			4	(23.5)	4	(11.8)						
	計	10	(58.8)	4	(23.5)	14	(41.2)						
4	なし	5	(29.4)	7	(41.2)	12	(35.3)	13	(65.0)	4	(21.1)	17	(43.6)
	あり	1	(5.9)	5	(29.4)	6	(17.6)	1	(5.0)	10	(52.6)	11	(28.2)
	計	6	(35.3)	12	(70.6)	18	(52.9)	14	(70.0)	14	(73.7)	28	(71.8)
5	なし							6	(30.0)	4	(21.1)	10	(25.6)
	あり			1	(5.9)	1	(2.9)			1	(5.3)	1	(2.6)
	計			1	(5.9)	1	(2.9)	6	(30.0)	5	(26.3)	11	(28.2)
全体	なし	16	(94.1)	7	(41.2)	23	(67.6)	19	(95.0)	8	(42.1)	27	(69.2)
	あり	1	(5.9)	10	(58.8)	11	(32.4)	1	(5.0)	11	(57.9)	12	(30.8)
	計	17	(100.0)	17	(100.0)	34	(100.0)	20	(100.0)	19	(100.0)	39	(100.0)

Tab.2 描画水準4及び5における描画の内容 数値は人数、()内は各水準内の%

年齢	水準	装飾傾向	男子						女子					
			日常の出来事		思い出		夢		日常の出来事		思い出		夢	
5歳児	4	なし	3	(50.0)	1	(16.7)	1	(16.7)	7	(58.3)				
		あり			1	(16.7)			1	(8.3)	3	(25.0)	1	(8.3)
		計	3	(50.0)	2	(33.3)	1	(16.7)	8	(66.7)	3	(25.0)	1	(8.3)
	5	なし												
		あり							1	(100.0)				
		計							1	(100.0)				
	全体	なし	3	(50.0)	1	(16.7)	1	(16.7)	7	(53.8)				
		あり			1	(16.7)			2	(15.4)	3	(23.1)	1	(7.7)
		計	3	(50.0)	2	(33.3)	1	(16.7)	9	(69.2)	3	(23.1)	1	(7.7)
1年生	4	なし	7	(35.0)	6	(30.0)			1	(7.1)	3	(21.4)		
		あり			1	(5.0)			2	(14.3)	8	(57.1)		
		計	7	(35.0)	7	(35.0)			3	(21.4)	11	(78.6)		
	5	なし	6	(30.0)					3	(60.0)			1	(20.0)
		あり							1	(20.0)				
		計	6	(30.0)					4	(80.0)			1	(20.0)
	全体	なし	13	(65.0)	6	(30.0)			4	(21.1)	3	(15.8)	1	(5.3)
		あり			1	(5.0)			3	(15.8)	8	(42.1)		
		計	13	(65.0)	7	(35.0)			7	(36.8)	11	(57.9)	1	(5.3)

Tab.3 自分以外で2番目までに描いた最初の家族、数値は人数、()内は各群における%

最初に描かれた家族	5歳児						1年生					
	男子		女子		計		男子		女子		計	
父	4	(23.5)	1	(5.9)	5	(14.7)	10	(50.0)	4	(21.1)	14	(35.9)
母	6	(35.3)	6	(35.3)	12	(35.3)	1	(5.0)	11	(57.9)	12	(30.8)
兄・姉	5	(29.4)	7	(41.2)	12	(35.3)	6	(30.0)	2	(10.5)	8	(20.5)
弟・妹	2	(11.8)	2	(11.8)	4	(11.8)	1	(5.0)	2	(10.5)	3	(15)
祖父母			1	(5.9)	1	(2.9)	2	(10.0)			2	(5.1)
全体	17	(100.0)	17	(100.0)	34	(100.0)	20	(100.0)	19	(100.0)	39	(100.0)

描画の内容は装飾傾向の有無とも関係する。この点に焦点を合わせてまとめると、描画水準4及び5の被検児58人中、装飾傾向の者は19人であった。その中の13人(68.9%)が「思い出」を描き(女子11人)、5人(26.3%)が「日常の出来事」を描いた(全て女子)。装飾傾向が見られない39人については、27人(69.2%)が「日常の出来事」を描き(女子11人)、10人(25.6%)が「思い出」を描いた(女子3人)。すなわち、装飾傾向のある「思い出」をテーマとした動的家族画は女子によって描かれやすい。描画の内容は、装飾傾向の有無によって、従ってまた男女差と関係して、変化する。

装飾傾向のある「思い出」の絵には、ピクニックや旅行など、屋外での家族一緒にの姿を描いたものが多い。そうした絵では添景として太陽や花を描きやすい。逆に言うと、画面の装飾に関心のある女児は、太陽や花や蝶などを描き入れやすい屋外での家族の活動の場面(例えばピクニックなど)を好んで描くとも考えられる。装飾傾向の有無が描画内容を規定する可能性も無視できないのである。

4° シンボルとスタイル 日比(1986)が挙げているシンボルを動的家族画に描き込んだ者は5歳児では21人(61.8%)いた。1年生は34人(87.2%)で、後者が有意に多かった($\chi^2=6.351$, $df=1$, $p<0.05$)。

スタイルに関しては、描画水準2及び3では一般的様式が93.3%だが、水準4では52.2%、水準5では58.3%と減少し、その分だけ他のスタイル、すなわち包囲や区分、辺縁などが出現す

る。一般的様式の出現率は、水準3と4の間で有意に異なっていた($\chi^2=7.440$, $df=1$, $p<0.05$)。

なお区分と辺縁を描いた5歳児は一人もいなかったが、1年生ではそれぞれ6人と2人に認められた。区分の出現率には両年齢群間で有意差があった($\chi^2=5.694$, $df=1$, $p<0.05$)。

動的家族画の投影的解釈では、シンボルもスタイルも重要な指標となっている。しかしながら、これらはいずれもその出現が発達の制約や男女差の影響を受けていることを本結果は示した。それ故、加藤(1999)が指摘したように、年少の子ども達の動的家族画に関しては、シンボルやスタイルに頼った投影的解釈には大いに慎重でなければならないだろう。

5° 描画の方向性 描画水準3は家族の羅列表現が特徴である。水準4でもまだその傾向がある。羅列表現の場合、対象を左から右あるいは右から左へと一方向に順々に描くのが普通なので、描画水準3から4がほとんどの5歳児では、画面の一侧から他側へと順々に家族を描く絵、すなわち方向性のある絵が多いと思われる。

実際、5歳児は19人が左から右へと一方向に家族を描き、5人が右から左へと家族を描いた。1年生では7人が左から右、3人が右から左へと一方向に家族を描いていた。描画に方向性がある5歳児24人(70.6%)と1年生10人(25.6%)の間には出現率に有意差があった($\chi^2=14.673$, $df=1$, $p<0.01$)。男女差は認められなかった。

6° 家族を描く順序 最初に誰を描き、次に誰を描くかという、家族を描く順序については、

5歳児では14人が最初に自分を描き、1年生でも14人が最初に自分を描いた。2番目までに自分を描いた者は5歳児20人(58.8%)、1年生28人(71.8%)となり、多くの子ども達が早い時点で自分を描いている。

自分を別にして2番目までに描かれた家族の中で最初に描かれた人物を、父親、母親、兄・姉、弟・妹、祖父・祖母の5群に分けて人数を示したのがTab.3である。

両親間の比較では、5歳児では父親を最初に描いた者5人(14.7%)、母親を最初に描いた者15人(44.1%)で、父親を最初に描く者は少ない。1年生では最初に父親を描く者が14人(35.9%)と増え、母親を最初に描く者も12人(30.8%)いるので、両親が最初に描かれる順序には差がない。父親を最初に描いた人数について5歳児と1年生の間で検定を行うと、両群間に有意傾向の差が認められた($\chi^2=4.307$, $df=1$, $p<0.08$)。

注目すべきことは、1年生の場合、父親を最初に描いた者14人中男子が12人、母親を最初に描いた者12人中女子が11人というように、それぞれ同性の子ども達の割合が高くなることである。この時期の子ども達の心に同性の親に対する同一視の感情が育ちつつあることが示唆される。

兄弟姉妹については、兄・姉の方が弟・妹に比較して最初に描かれやすい。5歳児と1年生を合わせると、兄・姉を画面に描いていた者は37人だったが、その中で最初に描いた者は20人(54.0%)だった。弟・妹を描いていた者は27人だったが、最初に描いた者は7人(25.9%)だった。兄・姉と弟・妹では最初に描かれる割合は有意に異なっていた($\chi^2=4.992$, $df=1$, $p<0.05$)。同一視の感情やライバル心など、年上の同胞に対して年下の同胞よりもより複雑な気持ちを抱きやすい結果だと解釈できる。

7° 家族機能テストとの関係 5歳児の母親に施行したFACEⅢは、回答者からみた家族の凝集性(Cohesion)と適応性(Adaptability)を測定する家族機能テストだった。凝集性は、家族成員がお互いにもつ情緒的つながりを指し、適応性は家族システムの勢力構造や役割関係を変

化させる能力として定義されている。この2つの測度と動的家族画との関係を調べた結果、5歳児が家族を描く順序とその母親が感じている家族の凝集性との間には興味深い1つの関係が見出された。

凝集性得点の得点範囲は10点から50点までである。34人の母親の凝集性得点の全体平均は、42.4(4.1)であった(括弧内は標準偏差)。そのうち自分以外の家族の中で父親を最初に描いたのは5人だった。この子達の母親の凝集性平均得点は44.6(2.3)であった。母親を最初に描いた子どもは12人、この12人の子どもの母親の凝集性平均得点は40.2(3.6)だった。t検定の結果、後者の母親の凝集性得点は前者の母親の得点よりも有意に低かった($t=2.373$, $df=15$, $p<0.05$)。

要するに、家族の中で母親を一番最初に描いた子どもの母親達は、父親を最初に描いた子どもの母親達に比較して、「家族みんなでなにかをするのが好き」「困ったとき家族のだれかに助けを求められる」「お互いに親しみを感じている」などの項目を肯定する度合いが低い。そこからはいわゆる母子密着型の家庭が想像される。そうした家庭の子どもが描く動的家族画では、家族の中で真っ先に母親が思い浮かぶことも大いにあり得ると考えられる。今後さらに資料を増して、検討を重ねたい結果であった。

5 絵が語る家族の問題・子どもの問題

最後に、絵の内容からみて注目すべき動的家族画を4枚取り上げて、紹介する。

家族が寝ている場面を描いたFig.6(水準4)

5歳児女子A子は、絵を描き始めてすぐ、「寝ている絵を描いてもいい」と聞いてきた。「どうして寝ている絵を描くの」と聞き返すと、「家族がみんな揃うのは、寝ている時だけだから」と言った。母親の感想文もそれが事実であることを認めている。父親は仕事が忙しく、朝、目覚めたときに隣にいる生活とのこと。「家族全員が何かしている絵を描かなければならない」という思いから、家族みんなが寝ている絵を描くこ

とになったと推察される。家にあまりいない父親に関しては寝ている姿しか具体的イメージを抱けていないこともうかがえる。

なお、家族全員で寝ている絵を描いた子どもは、5歳児ではA子以外に3人いた。Burns & Kaufman (1972)は「描かれた人物すべてがベットに入っている場合、性的なテーマや陰うつなテーマと結びついており、非常に重い抑うつを反映している」と述べているが、4人の普段の姿からはそうした解釈は適当ではない。

またこの絵のように家族がそれぞれ寝具にくるまっている絵は、スタイルとしては包囲に該当する。包囲は強い恐れや不安の表現とされているが(日比, 1986, 56頁), A子をこのように解釈することも納得しがたい。

1年生では家族全員が寝ている絵を描いた者はいなかった。この年齢になると、たとえ父親とは寝る時しか一緒にいられない場合でも、日常生活の中での父親の他の姿をイメージし、表現できるまでに発達していると考えられる。兄と喧嘩した場面を描いた Fig. 7 (水準5)

1年生男子B男は、友達に気に入らないことをされると、すぐに手や足が出る。自分の思いを言葉にして表すことがまだ十分ではないので、それがすぐ暴力という形になる。この子は父親を描かなかった。2階にいるから描けなかったと言う。しかしこの絵でもっと問題なのは、本人の隣に描かれた小学4年生の兄の怒った表情である。兄が怒っている理由をたずねると、B男は「喧嘩して、俺が殴ったけん、怒っとる」と微笑みを浮かべながら答えた。兄を端の方に小さく描いていることも含めて、兄に対するB男の複雑な思いがこの絵には表れている。

2年生になり、B男の母親はこの子の問題を認めて、カウンセリングを受けさせることに同意した。しかし急にそれを断り、しばらくして母親が家を出て行った。それ以来帰ってきていない。B男は、これをきっかけに無気力状態になっていった。父親は、必死に子どもに関わる努力をしているが、状況が改善される様子はその後認められない。

両親離婚の子が描いた Fig. 8 (水準4)

学校での生活にはまったく問題の見られない1年生男子C男は、テーブルを囲んで家族で食事をしている絵を描いた。家族の表情もよく、一見何の問題もなさそうに見える。しかしこの絵は現実のものではない。両親が離婚し、C男は父方に引き取られ、今は祖母と父親との3人暮らしである。本人は昔のことを描いたと言っていたが、その時の表情はあまりよいものではなかった。絵の中の母親は、最後に、そして他の家族との距離は微妙に遠く、また、紙の端の方に描かれた。しかも母親には椅子がない。母親を登場させてしまったのは、母親に対するC男の切ない思いの現われなのかもしれない。

担任教師の話聞いた段階で初めて我々は、母親の描き方にC男の思いが込められている可能性に気づいた。しかし絵を見ただけではそうしたことには思い及ばなかったので、描画水準の決定は、最初の判定通り水準4としている。

C男は、母親がいなくなった当初は情緒不安定で泣くことが多く、何をするにも自信が持てず、行動も遅かった。しかし2年生になると、母親がいなかったことを受け入れたのか、性格も明るくなり、しっかりしてきた。何事にも前向きに取り組めるようになった。父親と祖母の愛情に包まれて、C男は確実に成長していつている。父親も祖母も学校行事にとでも積極的である。C男が寂しい思いをしないようによく努力していると担任教師は2人を評価していた。

人間を1人も描いていない Fig. 9

1年生男子D男は、短気で、気に入らないことがあると嘔みつくなど、人と合わせることが難しい子である。彼はこの絵を40分かけて描いた。肝心の家族の姿は全く見られない。父親は法事で外出し、母親と弟と妹は画面左に描かれた車で買い物に行くところだと言う。D男と小学3年生の兄は画面中央よりやや右に描かれた三角屋根の家で留守番とのこと。D男に家族を描くように再度話したが、「人は難しく描けない」と言い、また別の絵を描き出した。人物を描くことは嫌がったが、絵を描くことには抵抗がなく、満足した様子だった。

D男のこの絵は人物を1人も描いていないの

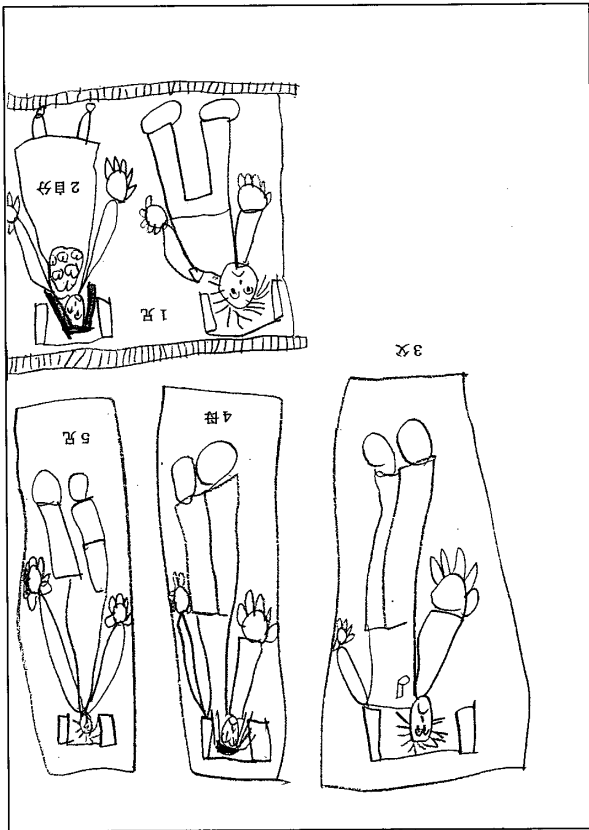


Fig. 6 6歳3ヶ月女子 家族で寝ている絵 (描画水準4)

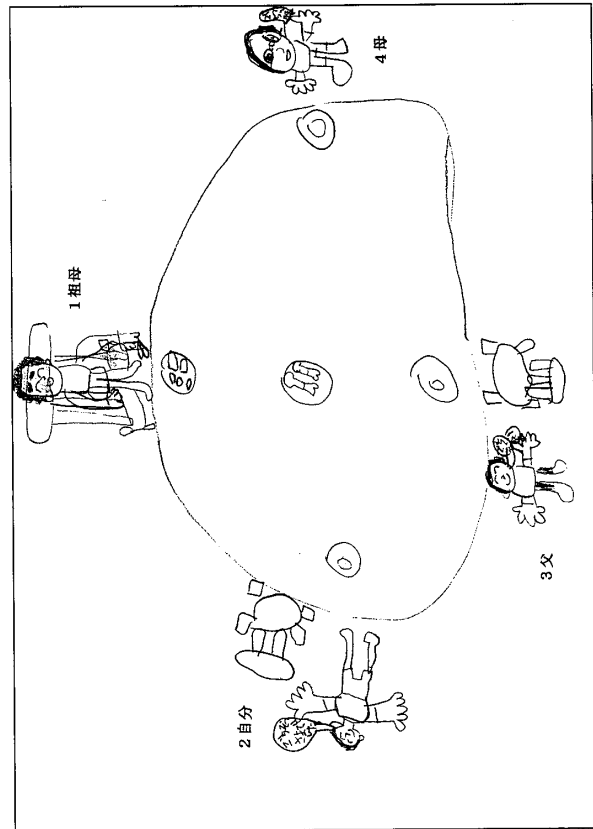


Fig. 8 7歳4ヶ月男子 両親離婚の子が描いた絵 (描画水準4)

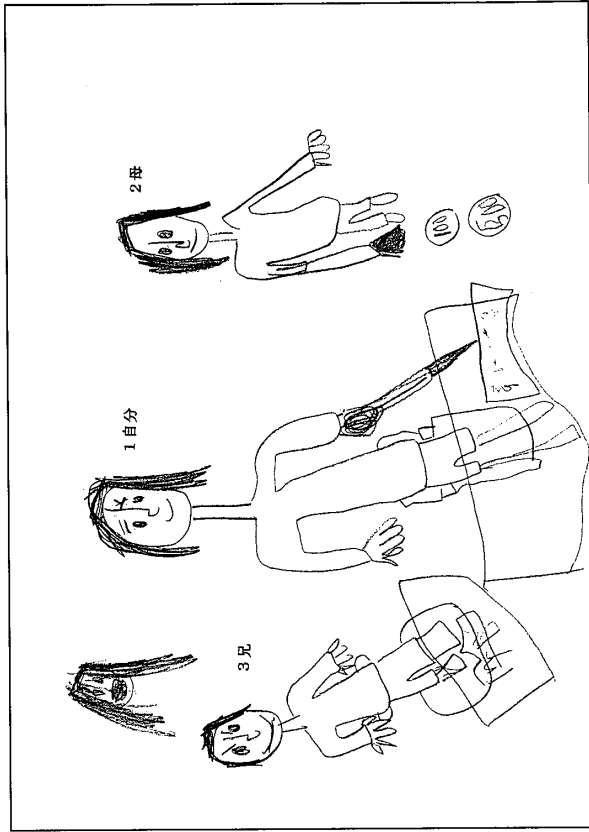


Fig. 7 7歳2ヶ月男子 兄と喧嘩をした絵 (描画水準5)

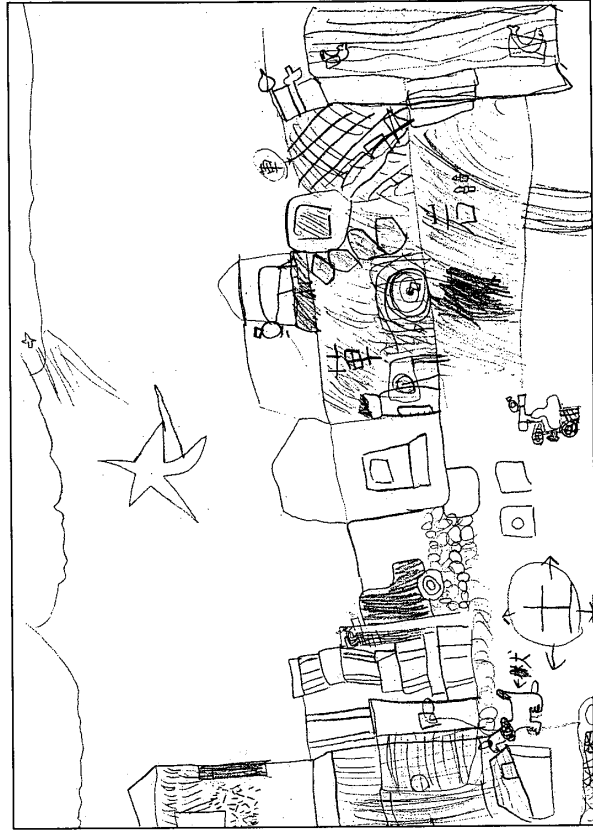


Fig. 9 7歳0ヶ月男子 誰も人間を描かなかった子の絵

で、動的家族画の要件をまったく満たしていない。絵の表現力という点では水準5に相当するとも思われたが、結果の分析に際してはこの絵を除外してデータの集計を行った。

D男の絵と同様に、人物画を描くように求められても全く人物を描かずに、町の絵を固執して描いた学習障害児社会認知型の8歳児の絵が『第10回日本描画テスト・描画療学会抄録集』の38-39頁に掲載されている。社会認知型とは、非言語性学習障害の下位分類の1つで、オリエンテーションや運動の不器用さはないが、社会生活をしていく上での知識や技能面での認知に問題がみられ、そのため社会的行動に支障を来しているタイプである。

D男は運動も器用ではないが、特に人と合わせる行動に目立って問題がある。クラスでは体育の時間に長縄跳びを盛んに行っていたが、D男は跳ぶときはうまくできる。しかし縄を回す役になると、もう1人の回し手とのタイミングを合わせられない。跳ぶ人のタイミングに合わせることはもっとできない。自分の好きな速さで、好きなように回し、友達が困っていることなど全くわかってないようである。また、2人で向き合い掛け声に合わせて一緒にジャンプするという簡単な体ほぐしの運動のときも、ペアの友達とジャンプのタイミングが合わず、何回繰り返してもできなかったとのことである。

D男が専門医の診察を受けたとは聞いていないので、彼が本当に障害をもっているかどうかは不明である。しかし、子どもの描く絵に学習障害をはじめとする臨床的問題が現れる可能性があることを示唆する点でこの絵は貴重な資料である。

担任教師の話によれば、両親がとても協力的な対応をしてくれたので、2年生になってからはC男の性格が少しずつ穏やかになり、安定して色々な活動に取り組めるようになっていく。友達に噛み付くこともなくなり、言い争いや喧嘩もほとんどなくなった。その結果、友達が増え、学力も上がっている。

6 結論

本研究では、幼稚園5歳児及び小学校1年生の動的家族画を発達の視点及び心理アセスメント的視点から検討した。

幼児期から児童期にかけての子どもの動的家族画は、①自分も含めて②家族全員が③何かをしているところを④頭の先から足の先まで、描くという動的家族画の要件をどれだけ満たしているか、その程度に対応した発達の特徴を示す。このような考え方に基づいて、5つの描画水準を仮説的に設け、子ども達の動的家族画がこれら5つの水準のどれに該当するかを調べることにした。

5歳児34人及び1年生39人が描いた動的家族画を、描画水準をはじめとして、装飾傾向、スタイル・シンボル、描画の方向性、家族を描く順序などに関して分析した。

分析結果から、5歳児及び1年生の動的家族画を次のように特徴づけることができる。

5歳児の動的家族画の描画水準は、水準3と4に集中していた。これらの水準では、人物は画面の左(右)から右(左)へと一方向に描かれることが多い。男子も女子も、日常の出来事を描いた絵が過半数を占めていた。家族を描く順序については、2番目にまでに自分を描いた者が約6割いた。自分を別にして2番目にまでに描かれた最初の人物が父親か、母親かについては、男子も女子も、父親を描く者は少なく、母親が多かった。

5歳児男子の絵は、約6割が描画水準3であった。家族全員を羅列して描いているが、何をしているところかは絵からは読み取れないタイプの絵である。また、男子では装飾傾向を示す絵はほとんどない。

5歳児女子では、7割が描画水準4だった。この水準の絵は、家族みんなが何かをしているところを描いているが、描き手から見た家族一人ひとりの個性やイメージは絵に表現されるまでに至っていない。結局、家族みんなと一緒に何かをしている絵になる。太陽、花、蝶を描き込んだ装飾傾向の絵が多い。

小学1年生は全員が描画水準4以上の絵を描いていた。そして男子も女子も3割は、描画水準5に到達し、家族の各メンバーについて描き手が抱いているイメージを絵に表現していた。

描画水準が高くなるにつれて、家族を画面の一侧から他側へと一方向に描く描き方、描画の方向性は減少する。動的家族画の投影的解釈において描き手の感情や対人関係の不調の指標と見なされてきた包囲や区分、辺縁などのスタイルが多く現れるようになる。シンボルもまた1年生で増える。

1年生男子の絵では、日常の出来事が描かれることが多く、装飾傾向の絵はごく少ない。女子の絵は、家族でのピクニックなど楽しい思い出の絵が多く、そうした思い出の絵では装飾傾向が顕著だった。

家族を描く順序については、2番目までに自分を描いた者が7割いた。自分を別にして2番目までに描かれた最初の家族は、1年生男子の場合は、母親よりも父親が多く、この点が5歳児とは違っていた。女子の場合は、父親よりも母親が多かった。

1年生男子では父親、1年生女子では母親が2番目までに描かれやすいという結果は、同性の親への同一視の感情がこの年齢の子どもに育ちつつあることを示唆する。また、年上の兄・姉を年下の弟・妹よりも早く描く傾向が、5歳児でも1年生でも見られた。これは、年上の同胞に対してライバル心や同一視など、複雑な感情をこの時期の子ども達が抱き始めていることをうかがわせる。

5歳児からは、母親に実施した家族機能テスト、FACEⅢに関する知見も得られた。自分は別にして2番目までに描いた最初の人物が母親の場合と父親の場合に子どもを分けて、その子の母親からの凝集性得点を比較すると、前者で家族の凝集性得点が有意に低かった。すなわち、母親を父親よりも早く、2番目までに描いた子どもの場合、その母親は自分の家族は情緒的つながりが弱いと感じていた。いわゆる母子密着型の家庭生活を想像させる結果であった。

本研究結果は、幼児期から児童期にかけての

子どもの動的家族画が発達の制約や男女差の制約を少なからず受けていることを示した。従って、動的家族画の投影的解釈の重要な指標とされているスタイルやシンボルについても、子どもの成長・発達の成果として、また男女差に関連づけて理解される必要がある。

これまでも述べたように、我々は年少の子どもの動的家族画について、それを投影的に解釈することは適切ではないと考える。投影的解釈には反対するが、だがしかし、動的家族画が子どもの理解の有用な方法であることについては否定しない。

Fig. 6の事例に即して言えば、家族が寝ている場面を描いたからといって、それを性的な感情とか死を暗示する気持ちの表れと解釈することには反対である。だが、なぜその子は家族が寝ている場面を描こうとしたのか、その理由を明らかにすること自体は、その子とその家族を理解する上で大いに重要であると考えられる。

Wallon (2001, 訳書97頁) は、子どもの絵について次のように言う。絵は、「子どもが経験する心の動揺と時間に伴うその変化を映し出す」が、「絵に表れた徴候が一義的な意味をもつことは少なく」、「子どもを直接知らない第3者が絵だけを見て解釈しようとしても……無理」である。しかし「子どもを知るほど、その意味をはっきりと読み取れるようになる」と。

動的家族画は、保育者や教師、そしてもちろん保護者など子どもに身近に関わっている大人にとって、その子の思いと成長、その子に対する自らの関わりのあり方などを見つめ直すための、子ども理解の有力な道具になると我々は考えている。

参考文献

- Burns, R.C. & Kaufman S. H. (1972) *Actions, Styles and Symbols in Kinetic Family Drawings (K-F-D) : An Interpretative Manual*. New York: Brunner/Mazel. (加藤孝正・伊倉日出一・久保義和 [訳] 『子どもの家族画診断』黎明書房, 1998年)
- 日比裕泰 (1986) 『動的家族描画法 (K-F-D) 家族画による人格理解』ナカニシヤ出版

東山明・東山直美 (1983) 『子どもの絵——成長をみつめて』 保育社

東山明・東山直美 (1999) 『子どもの絵は何を語るか 発達科学の視点から』 日本放送出版協会

加藤孝正 (1999) 動的家族画 (K-F-D) の発達 『臨床描画研究XIV』 金剛出版, 30-42.

Knoff, H.M. & Prout, H.T. (1985) Kinetic Drawing System for Family and School: A Handbook. Western Psychological Services (加藤孝正・神戸誠 [訳] 『学校画・家族画ハンドブック』 金剛出版, 2000年)

草田寿子・岡堂哲雄 (1993) 家族関係査定法 岡堂哲雄 (編) 『心理検査学』 垣内出版, 573-581.

草田寿子 (1995) 日本版 FACES III の信頼性と妥当性 カウンセリング研究, 28 (2), 154-162.

Olson, D.H., McCubbin, H.I., Larsen, A., Muxen, M., & Wilson, M. (1985) Family Inventories. St. Paul, MN: Family Social Science, University of Minnesota.

Prout, H.T. & Celmer, D.S. (1984) School Drawings and Academic Achievement: A Validity Study of the Kinetic School Drawing Technique. Psychology in the Schools, 21, 176-180.

Prout, H.T. & Phillips, P.D. (1974) A Clinical Note: The Kinetic School Drawing. Psychology in the Schools, 11, 303-306.

皆本二三江 (1984) 児童の描画におけるケニアとわが国の性差傾向の類似について, 『武蔵野女子大学紀要』, 20, 149-161

皆本二三江 (1986) 『絵が語る男女の性差 幼児画から源氏物語絵巻まで』, 東京書籍

辻政博 (2003) 『子どもの絵の発達過程』 日本文教出版

Wallon, P. (2001) Le Dessin d'Enfant (Collection QUE-SAIS-JE No.3591) (加藤義信・井川真由美 [訳] 『子どもの絵の心理学入門』 白水社, 2002年)

第10回日本描画テスト・描画療学会準備委員会 (2000) 『第10回日本描画テスト・描画療学会抄録集』

謝辞

本研究の実施に際しましては、幼稚園5歳児クラスの担任の先生及び小学校1年生クラスの担任の先生にたいへんお世話になりました。また、園及び学校での子どもたちの様子について貴重なお話を聞かせていただきました。ありが

とうございました。